

ふくしまレッドリスト（2022年版）見直しの理由

番号	生物群名	目名	科名	和名	学名	ふくしまRL2021 (旧) カテゴリー	ふくしまRL2022 カテゴリー	見直しの理由	参考文献 (別紙一覧)
1	維管束植物	単子葉植物	アマモ科	エビアマモ	<i>Phyllospadix japonicus</i> Makino	未掲載	情報不足	須田（2021）でいわき市から報告された。大場・宮田（2020）の分布図にもいわき市付近に点が打たれている。標本が確認されおらず、最近の集団数や個体数が不明。	1,2
2	維管束植物	真正双子葉植物	キク科	コバナノコウモリソウ	<i>Parasenecio chokaiensis</i> (Kudô) Kadota	準絶滅危惧	情報不足	福島県植物誌編さん委員会（1987）および福島県生活環境部環境政策課（2002）で甲子溪谷が産地にあげられているが、標本が確認されていない。飯豊山に生育していることは確認されており（改訂新版日本の野生植物）、福島県側にも生育しているとの報告がある（小林・鈴木 1956）。	3-5
3	維管束植物	真正双子葉植物	マメ科	マキエハギ	<i>Lespedeza virgata</i> (Thunb.) DC.	未掲載	絶滅危惧 I A類	福島大学貴重資料保管室FKSEには1950年に郡山市で確認された標本がある（FKSE6456）。福島県植物誌編さん委員会（1987）では3ヶ所の産地があげられている。	6
4	維管束植物	単子葉植物	カヤツリグサ科	ヒロハノオオタマツリスゲ	<i>Carex filipes</i> Franch. et Sav. var. <i>arakiana</i> (Ohwi) Ohwi	絶滅危惧 I B類	情報不足	標本が確認できない。すげの会（2018）にも福島県の産地はあげられていない。	7
5	維管束植物	単子葉植物	カヤツリグサ科	イソアオスゲ	<i>Carex meridiana</i> (Akiyama) Akiyama	絶滅危惧 I B類	削除	細越他（2005）および黒沢他（2015）で相馬市松川浦から報告されたが、証拠標本（FKSE12040, 12207, 61936）はいずれもメアオスゲであった。	8-9
6	維管束植物	真正双子葉植物	バラ科	アズマイバラ	<i>Rosa onoei</i> Makino var. <i>oligantha</i> (Franch. et Sav.) H. Ohba	絶滅危惧 I B類	削除	細越他（2005）および黒沢他（2015）で相馬市松川浦から報告されたが、証拠標本（FKSE12488, 12501）はいずれもテリハノイバラであった。	8-9
7	維管束植物	単子葉植物	ホシクサ科	クロイヌノヒゲ	<i>Eriocaulon atrum</i> Nakai	情報不足	絶滅危惧 II類	Miyamoto & Ohba (1988), 宮本 (2015), 高田 (2017) の見解に従うと尾瀬, 白河市やいわき市に生育する黒花で雌花花弁基部が柄状になる植物が該当する。白河市周辺でナスノクロイヌノヒゲとして扱われてきた植物はクロイヌノヒゲに含まれる (高田 2017)。	10-12

8	昆虫類	甲虫目	ゲンゴロウ科	キボシケシゲンゴロウ	<i>Allopachria flavomaculata</i> (Kamiya, 1938)	未掲載	情報不足	<p>本種は北海道から九州、屋久島まで分布し、福島県では南会津郡南会津町湯ノ花町で2017年に1個体が発見された(吉井・平澤, 2021)。同地では2020年に1個体が追加記録されている。その後、2022年に南相馬市、会津若松市、西会津町でも発見されているが(平澤未発表)、どの地点も確認個体数は1-2個体と非常に少ない。県内では会津地方と浜通り地方から発見されていることから広域分布であると考えられるが、県内の水生甲虫類の専門家らによって広範囲にわたって実施されてきた調査でも、生息が確認された地点は少なく、他県のような多産地が現在のところ見当たらない。本種は流水性で、水質が良好な河川に生息し、河川緩流域の植物の根際や石の隙間、落ち葉などの堆積物から得られる。生息している河川における水質汚染による影響や、護岸工事などの開発による環境変化が懸念される。環境省レッドリスト2020では情報不足である。</p> <p>「情報不足」の定性的要件である「どの生息地においても生息密度が低く希少である」、「生息地が局限されている」には当てはまる。</p>	13
9	昆虫類	甲虫目	ミズスマシ科	ミズスマシ	<i>Gyrinus japonicus</i> Sharp, 1873	情報不足	準絶滅危惧	<p>本種は本州から九州まで広く分布し(北海道の分布は疑問)、福島県内でも平野部から丘陵地にかけて広く分布するようであるが、ミヤマミズスマシが生息する高標高域(高原域を含む)、寒冷地には分布しない(裏磐梯地域には分布していない)。止水域や河川の淀みなどの緩流域の開放水面が主な生息環境であるが、県内の止水域では安定した生息地は少なく、河川緩流域でも個体密度は概して高くない(塘ら、投稿中)。表磐梯地域の猪苗代湖及びその周辺域には希少な水生甲虫類が多数生息しているが、本種の生息が確認された場所は少なく、生息地の個体密度も低い(塘, 2017)。酸性水域のため水質悪化が避けられている長瀬川河口域は個体数が多いことから(塘・横山, 2020)、本種は水質が良好な場所に生息するものと考えられる。堀川ダム流入部付近のワンドは個体数の多い生息地であったが、特定外来生物のウチダザリガニが侵入したことにより、激減してしまった。浜通り地方では太陽光発電事業や風力発電事業の計画に伴うアセスメント調査で新たな生息地がいくつか見つかった。生息環境保全に配慮はされるものの、森林伐採や土砂流入など、環境変化による影響が懸念される。全国的な本種の減少原因は、湖沼開発、河川開発、湿地開発などの生息環境悪化と水質汚濁、農業汚染であり、本県でも太陽光発電事業や風力発電事業が進められると、これらの減少原因が生じ、生息地がさらに減る可能性がある。環境省レッドリスト2020では絶滅危惧II類である。</p> <p>準絶滅危惧の定性的要件、現時点で絶滅の危険度は小さいが、「分布域の一部において、個体数が減少している」、「生息条件が悪化している」には当てはまる。</p>	14-16

10	淡水魚類	コイ目	ドジョウ科	キタドジョウ	Misgurnus chipisaniensis Shedko and Vasil'eva, 2022	情報不足	準絶滅危惧	採集と遺伝的な解析により、会津(阿賀野川水系)と中通り北部(阿武隈川水系)、浜通り側河川の一部に生息することが明らかになった。確認地点数は少ないが、確認した生息地は山間部に古くからある池や丘陵地内の湿地などで、いずれも低水温で周囲から隔離された水域であった。これらの水環境は、かつて県内各地にみられたものと思われるが、現在では丘陵地の開発や外来種の放流などの影響によって環境が大きく変化したことから、多くの地域で本種が消滅した可能性がある。 今後、調査により新たな生息地が確認される可能性があるものの、現在までに確認されている県内の生息地は数か所であり、生息環境の変化や、生息エリアの縮小により、各個体群の孤立化が進み、遺伝的な多様性が低下する心配がある。現生息地の保全が必須である。 ※近縁種のドジョウは県内に広く分布、記録されているが、本種が含まれている可能性があり、過去の確認地のなかでも山間部湖沼の記録については再調査する必要がある。	17-23
11	淡水魚類	スズキ目	ハゼ科	シマヨシノボリ	Rhinogobius nagoyae Jordan and Seale	情報不足	準絶滅危惧	調査により、県内の太平洋流入河川(阿武隈川水系と太平洋沿岸の中小河川)に広く分布することが明らかになった。1990年代までは、比較的普通に確認されるハゼ科魚種であったが、2000年代になり、各河川で個体数が減少した。一部で良好な生息地もあるものの、ダムによる生息域の分断、河川工事や土砂、生活排水の流入などの要因により減少が著しい。かつて本種が数多く生息した河川中流域の平瀬では、ヌマチチブやウキゴリなどの在来ハゼ科魚類の姿が目立つが、これらとの因果関係については不明。	17, 20, 24
12	両生類	有尾目	サンショウウオ科	イワキサンショウウオ	Hynobius sengokui Matsui, Misawa, Yoshikawa et Nishikawa, 2022	絶滅危惧 I 類	絶滅危惧 I 類	和名の変更。関東から本県東南部に分布するトウキョウサンショウウオとされた個体のうち、本県東南部から茨城県、栃木県東部の個体が、近年の解析により遺伝的に分化していることから、2022年に新種(イワキサンショウウオ)として独立。タイプ産地はいわき市。トウキョウサンショウウオと近縁で形態的に似るが、本種のほうが前後肢間距離が長い、肋骨列が深いといった傾向がある。ただし、計測値はかなり重複するという。東白川郡の個体は近年確認できず、いわき市各地の個体群も、丘陵地の開発により1990年代と比較し減少が著しい。近年ではアライグマによる食害も懸念されている。	25-29

13	両生類	無尾目	アカガエル科	ムカシツチガエル	Glandirana reliquia Shimada, Matsui, Ogata et Miura 2022	未掲載	情報不足	本州、四国、九州や佐渡島、隠岐などに分布するツチガエルのうち、東北地方太平洋側から関東・中部(山梨、長野)にかけて分布する個体は、他地域のツチガエルとは遺伝的に明確な異なりがあり、分布境界域での雑種もみられないことから2022年に新種として記載された。ツチガエルよりも古い時代に大陸産の近縁種から分化しているとされる。幼生はツチガエルよりも腹面に分布する腺の数が少ないとされるが、外見上の判別は困難。本県の浜通りと中通りに分布するが、震災原発事故以降、里山水田の消滅や、復興に伴う工事や丘陵地の開発により、特に阿武隈高地を含む浜通りで減少していると考えられるが現状不明。会津地方にはツチガエルが分布する。	27, 29, 30
14	海岸動物	ヨメガカサ目	コガモガイ科	ツボミ	<i>Patelloida conulus</i>		絶滅危惧Ⅰ類	松川浦では震災で減少し、少数が時々見られる程度である。	31-39
15	海岸動物	オニノツノガイ目	ウミニナ科	ウミニナ	<i>Batillaria multiformis</i>		絶滅危惧Ⅰ類	松川浦本体では震災後は激減し、宇多川湿地や尾浜地区地先の干潟に極めて少数が見られるのみ。	31-39
16	海岸動物	オニノツノガイ目	キバウミニナ科	フトヘナタリ	<i>Cerithidea moerchii</i>		絶滅危惧Ⅰ類	松川浦本体に生息していた個体は震災ですべて失われた。現在は宇多川湿地に少数が生息するのみ。	31-39
17	海岸動物	オニノツノガイ目	キバウミニナ科	カワアイ	<i>Pirenella pupiformis</i>		絶滅危惧Ⅰ類	松川浦では震災後には2012年を除いて発見されていない。	31-39
18	海岸動物	エソタマキビ目	ワカウラツボ科	サザナミツボ	<i>"Nozeba" ziczac</i>		絶滅危惧Ⅰ類	松川浦・鮫川ともに記録があるが近年確認されていない。	31-39
19	海岸動物	十脚目	モクズガニ科	ハマガニ	<i>Chasmagnathus convexus</i>		絶滅危惧Ⅰ類	松川浦では震災前後を通じ2016年、2019年、2021年に宇多川湿地で記録されたのみ。極めて少ない。古い写真での記録があった。鮫川河口では左岸部のヨシ原に比較的まとまった個体群が生息している。	31-39
20	海岸動物	マルスダレガイ目	マルスダレガイ科	ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>		絶滅危惧Ⅰ類	松川浦では震災後は宇多川河口周辺で毎年確認されていたが、2020年以降は出現していない。	31-39
21	海岸動物	(サシバゴカイ類)	ウロコムシ科	アナジャコウロコムシ	<i>Hesperonoe japonensis</i>		絶滅危惧Ⅰ類	松川浦では震災後に新たに生息が確認された。2019年以降に鵜の尾干潟で記録されたが、極めて少ない。	31-39
22	海岸動物	十脚目	ペンケイガニ科	カクペンケイガニ	<i>Parasesarma pictum</i>		絶滅危惧Ⅰ類	中型サイズのカニ類である本種は、房総以南、沖縄諸島までに分布するとされていた。海岸のコンクリート護岸のすき間や岩場など底質の硬いところに生息する。鮫川河口右岸側において2015年に初めて発見されて以来、毎年生息が確認されているが、生息場所が限られており、巣穴のある土手の部分が改変、崩壊したりすると、絶滅のおそれがある。最近宮城県や岩手県でも発見されたことから、分布域を北に伸ばしている可能性もある。	31-39

23	海岸動物	エゾタマキビ目	カワザンシヨウ科	ヨシダカワザンシヨウ	<i>"Angustassiminea" yoshidayukioi</i>		絶滅危惧Ⅱ類	継続的に見られるヨシ原が鮫川のみ	31-39
24	海岸動物	エゾタマキビ目	カワザンシヨウ科	ツブカワザンシヨウ	<i>"Assiminea" estuarina</i>		絶滅危惧Ⅱ類	松川浦・鮫川ともに近年記録されているが潮間帯上部の転石帯というハビタット自体が福島県内では非常に希少である。	31-39
25	海岸動物	エゾタマキビ目	カワザンシヨウ科	ヒナタムシヤドリカワザンシヨウ	<i>Assiminea aff. parasitologica</i>		絶滅危惧Ⅱ類	継続的に見られるヨシ原が鮫川のみ	31-35, 37-39
26	海岸動物	エゾタマキビ目	ワカウラツボ科	カワグチツボ	<i>Fluviocingula elegantula</i>		絶滅危惧Ⅱ類	松川浦では震災後の2019年以降に出現するようになった。マツカワウラカワザンシヨウなどと混生する	31-35 37-39
27	海岸動物	新腹足目	オリイレヨフバイ科	ムシロガイ	<i>Nassarius livescens</i>		絶滅危惧Ⅱ類	干潟部での確認事例が少ないが、松川浦の鵜の尾干潟潮下帯アマモ場付近に生息している可能性が高い。	31-35 37-39
28	海岸動物	(ツバサゴカイ類)	ツバサゴカイ科	ツバサゴカイ	<i>Chaetopterus cautus</i>		絶滅危惧Ⅱ類	松川浦では震災後は毎年確認されているが、局所的で生息する場所は限られている。鮫川河口では左岸ラグーン部で2014年に記録されたのみ。	31-35 37-39
29	海岸動物	(ユムシ類)	ユムシ科	ユムシ	<i>Urechis uncinatus</i>		絶滅危惧Ⅱ類	松川浦では震災後まれに見つかる程度である。最近では2017年と2021年に1個体が出現したのみである。また、鮫川河口右岸で2016年に1個体が出現した。	31-35 37-39
30	海岸動物	十脚目	モクズガニ科	トリウミアカイソモドキ	<i>Sestrostoma toriumii</i>		絶滅危惧Ⅱ類	松川浦では震災後は長く見られないままであったが、2018年、2019年、2021年、2022年に生息が確認された。しかし極めて少ない。鮫川河口右岸では2014年、2019年、2020年に出現した。	31-35 37-39
31	海岸動物	イソギンチャク目	-	ハウザワイソギンチャク	<i>Synandwackia hozawai</i>		準絶滅危惧	松川浦・鮫川ともに記録があるが少数である。	31-35 37-39
32	海岸動物	異紐虫目	リネウス科	オロチヒモムシ	<i>Cerebratulus orochi</i>		準絶滅危惧	松川浦鵜の尾干潟で継続的に確認されているが少ない。	31-35 37-39
33	海岸動物	アマオブネ目	アマオブネ科	イシマキ	<i>Clithon retropictum</i>		準絶滅危惧	鮫川河口でのみ確認されている。長距離分散する種であるが、生息環境(転石のある河川河口部の流れ込み)が福島県内では乏しい可能性がある	31-35 37-39
34	海岸動物	エゾタマキビ目	カワザンシヨウ科	クリイロカワザンシヨウ	<i>Angustassiminea castanea</i>		準絶滅危惧	継続的に見られるヨシ原が鮫川のみ	31-35 37-39
35	海岸動物	エゾタマキビ目	カワザンシヨウ科	マツカワウラカワザンシヨウ	<i>"Assiminea" sp. H</i>		準絶滅危惧	福島県内で見ると松川浦内で多産しているものの、その他の場所では見つかっておらず、全国的にも生息場が松川浦に限られているため希少である。	31-35 37-39
36	海岸動物	頭楯目	カノコキセワタ科	ヤミヨキセワタ	<i>Melanochlamys fukudai</i>		準絶滅危惧	松川浦で震災後毎年確認されているが多くは無い。	31-35 37-39
37	海岸動物	ウロコガイ目	チリハギ科	ガタヅキ	<i>Arthritica cf. reikoae</i>		準絶滅危惧	震災後に松川浦・鮫川で複数回記録されているが、生息域は限定されており希少である。	31-35 37-39
38	海岸動物	ドブシジミ目	ニッコウガイ科	ザビシラトリ	<i>Limecola contabulata</i>		準絶滅危惧	汽水域の泥干潟を特徴付ける種であり、県内でも全国的にも希少。	31-35 37-39
39	海岸動物	ドブシジミ目	ニッコウガイ科	ユウシオガイ	<i>Jitlada culter</i>		準絶滅危惧	松川浦の鵜の尾では比較的産するがそれ以外の干潟ではほとんどみられない。	31-35 37-39

40	海岸動物	オオノガイ目	オオノガイ科	オオノガイ	<i>Mya japonica</i>		準絶滅危惧	松川浦で震災後減少した可能性が高く、鮫川ラグーンでは復旧工事後確認されていない。	31-35 37-39
41	海岸動物	オオノガイ目	ニオガイ科	ニオガイ	<i>Barnea fragilis</i>		準絶滅危惧	松川浦でみられる泥岩地形が生息場として重要である。	31-35 37-39
42	海岸動物	(サシバゴカイ類)	ゴカイ科	イトメ	<i>Tylorrhynchus osawai</i>		準絶滅危惧	震災後に松川浦・鮫川で複数回記録されているが、生息域(淡水の影響の強い汽水域)は限定されており希少である。	31-35 37-39
43	海岸動物	十脚目	ハサミシャコエビ科	ハサミシャコエビ	<i>Laomedea astacina</i>		準絶滅危惧	松川浦のみであり、生息場である潮上帯のヨシ原付近が保全されている場も少ない(鵜の尾と宇田川周辺のみ)	31-35 37-39
44	海岸動物	十脚目	コブシガニ科	マメコブシガニ	<i>Pyrhila pisum</i>		準絶滅危惧	松川浦で震災後には毎年見られているが多くはなく、個体群サイズが小さい。	31-35 37-39
45	海岸動物	十脚目	ベンケイガニ科	アカテガニ	<i>Chiromantes haematocheir</i>		準絶滅危惧	松川浦での震災後の減少傾向が大きい。宮城県でも減少している。	31-35 37-39
46	海岸動物	十脚目	ベンケイガニ科	クロベンケイガニ	<i>Orisarma dehaani</i>		準絶滅危惧	鮫川では河口右岸の土手、水路やヨシ原に比較的多産しているが松川浦での震災後の減少傾向が大きい。宮城県でも減少している。	31-35 37-39
47	海岸動物	十脚目	スナガニ科	スナガニ	<i>Ocypode stimpsoni</i>		準絶滅危惧	開放的な砂浜環境で特定の潮位の場所に巣穴を形成して生息するため、砂浜環境の改変が生息を脅かす。宮城県では近年南方系のツノメガニ(スナガニの稚ガニを食べる)やナンヨウスナガニの加入が確認されており、気候変動の影響も危惧されている。	31-35 37-39
48	海岸動物	十脚目	ムツハアリアケガニ科	アリアケモドキ	<i>Deiratonotus cristatus</i>		準絶滅危惧	汽水域を特徴付ける種。県内で安定して見られる生息場所が鮫川河口のみである。	31-35 37-39
49	海岸動物	ニシキウズ目	ニシキウズ科	イボキサゴ	<i>Umbonium moniliferum</i>		情報不足	過去に松川浦で記録があり、その後確認されていないため情報不足(DD)。	31-35 37-39
50	海岸動物	エソタマキビ目	ミズゴマツボ科	エドガワミズゴマツボ	<i>Stenothyra edogawensis</i>		情報不足	過去に松川浦で記録があり、その後確認されていないため情報不足(DD)。	31-35 37-39
51	海岸動物	頭楯目	クダタマガイ科	マツシマコメツブ	<i>Decorifer matusimanus</i>		情報不足	松川浦・鮫川で記録されているが、近年みつかっておらず情報不足(DD)	31-35 37-39
52	海岸動物	異形目	ガクバンゴウナ科	イリエゴウナ	<i>Ebala</i> sp.		情報不足	松川浦で記録されているが情報不足(DD)	31-35 37-39
53	海岸動物	トウガタガイ目	トウガタガイ科	ヨコイトカケギリ	<i>Cingulina circinata</i>		情報不足	松川浦で記録されているが情報不足(DD)	31-35 37-39
54	海岸動物	トウガタガイ目	トウガタガイ科	シゲヤサイトカケギリ	<i>Pyrgulina shigeyasui</i>		情報不足	松川浦で記録されているが情報不足(DD)	31-35 37-39
55	海岸動物	キヌタレガイ目	キヌタレガイ科	アサヒキヌタレガイ	<i>Solemya japonica</i>		情報不足	火力発電所の排海水が流入する鮫川河口のラグーン部で記録されており、福島県沿岸の潮下帯に生息している可能性が高いがその実態が不明である。	31-35 37-39
56	海岸動物	ウロコガイ目	チリハギ科	スジホシムシモドキヤドリガイ	<i>Nipponomysella subtruncata</i>		情報不足	火力発電所の排海水が流入する鮫川河口のラグーン部で記録されており、ホストであるスジホシムシモドキとともに福島県沿岸の潮下帯に生息している可能性が高いがその実態が不明である。	31-35 37-39

57	海岸動物	ドブシジミ目	ニッコウガイ科	オオモノハナ	<i>Praetextellina praetexta</i>		情報不足	火力発電所の排海水が流入する鮫川河口のラグーン部で記録されており、福島県沿岸の潮下帯に生息している可能性が高いがその実態が不明である。	31-35 37-39
58	海岸動物	ドブシジミ目	ニッコウガイ科	マルクサビザラ	<i>Cadella narutoensis</i>		情報不足	火力発電所の排海水が流入する鮫川河口のラグーン部で記録されており、福島県沿岸の潮下帯に生息している可能性が高いがその実態が不明である。	31-35 37-39
59	海岸動物	ドブシジミ目	ニッコウガイ科	ゴイサギ	<i>Macoma tokyoensis</i>		情報不足	火力発電所の排海水が流入する鮫川河口のラグーン部で記録されており、福島県沿岸の潮下帯に生息している可能性が高いがその実態が不明である。	31-35 37-39
60	海岸動物	ドブシジミ目	ニッコウガイ科	モモノハナ	<i>Moerella hilaris</i>		情報不足	鮫川河口の高塩分環境であるラグーン部で記録されており、福島県沿岸の潮下帯に生息している可能性が高いがその実態が不明である。	31-35 37-39
61	海岸動物	ドブシジミ目	ニッコウガイ科	サクラガイ	<i>Nitidotellina hokkaidoensis</i>		情報不足	火力発電所の排海水が流入する鮫川河口のラグーン部で記録されており、福島県沿岸の潮下帯に生息している可能性が高いがその実態が不明である。	31-35 37-39
62	海岸動物	ドブシジミ目	シオサザナミ科	フジナミガイ	<i>Hiatula boeddinghausi</i>		情報不足	火力発電所の排海水が流入する鮫川河口のラグーン部で記録されており、福島県沿岸の潮下帯に生息している可能性が高いがその実態が不明である。	31-35 37-39
63	海岸動物	(イトゴカイ類)	イトゴカイ科	シダレイトゴカイ	<i>Notomastus cf. latericeus</i>		情報不足	松川浦の鵜の尾で震災後に採取されている、高塩分環境に出現する大型の <i>Notomastus</i> 属。希少性が高いが分類を含め情報不足 (DD)。	31-35 37-39
64	海岸動物	(フサゴカイ類)	フサゴカイ科 (Polycirridae 科)	カンテンフサゴカイ	<i>Amaeana</i> sp.		情報不足	松川浦で記録されているが情報不足 (DD)	31-35 37-39
65	海岸動物	(ユムシ類)	ミドリユムシ科	ドチクチユムシ	<i>Arhynchite arhynchite</i>		情報不足	干潟での出現記録が少ない種であるが松川浦・鮫川のいずれにも出現した。情報不足 (DD)。	31-39
66	海岸動物	(ホシムシ類)	スジホシムシ科	スジホシムシ	<i>Sipunculus nudus</i>		情報不足	火力発電所の排海水が流入する鮫川河口のラグーン部で記録されており、福島県沿岸の潮下帯に生息している可能性が高いがその実態が不明である。	31-35 37-39
67	海岸動物	(ホシムシ類)	スジホシムシモドキ科	スジホシムシモドキ	<i>Siphonosoma cumanense</i>		情報不足	鮫川ラグーンや松川浦で過去に記録がある。福島県沿岸の潮下帯に生息している可能性が高いがその実態が不明である。	31-35 37-39
68	海岸動物	隠足目	カウディナ科	シロナマコ	<i>Paracaudina chilensis</i>		情報不足	福島県沿岸の潮下帯に生息している可能性が高いがその実態が不明である。	31-35 37-39
69	海岸動物	-	ギボシムシ科	ハネナシギボシムシ	<i>Glandiceps hacksii</i>		情報不足	松川浦で記録されているが情報不足 (DD)。1960年代に宮城県仙台湾潮下帯から記録がある。	31-35 37-40

(別紙) 参考文献一覧

1	須田昌宏. 2021. 福島県海藻. 自費出版.
2	大場達之・宮田昌彦. 2020. 日本海藻図譜 [改訂版]. 北海道大学出版会, 札幌.
3	福島県植物誌編さん委員会(編). 1987. 福島県植物誌. 福島県植物誌編さん委員会, いわき.
4	福島県生活環境部環境政策課(編). 2002. レッドデータブックふくしま! 福島県の絶滅のおそれのある野生生物(植物・昆虫類・鳥類). 福島県生活環境部環境政策課, 福島.
5	小林勝・鈴木貞次郎. 1956. 福島県植物誌 其五 双子葉植物-合弁花類. 福島大学学芸学部(謄写版冊子).
6	福島県植物誌編さん委員会(編). 1987. 福島県植物誌. 福島県植物誌編さん委員会, いわき.
7	すげの会. 2018. 日本産スゲ属植物分布図集. すげの会, 岡山.
8	細越啓・北岡文美代・坪井恭子・黒沢高秀・杉山廣雄. 2005. 松川浦の植物目録. 福島県生活環境部自然保護グループ(編), 重要湿地松川浦総合調査報告書, pp. 155-197. 福島県生活環境部自然保護グループ, 福島.
9	黒沢高秀・根本秀一・葛西英明・湯澤陽一・薄葉満・菅野修三・伊賀和子・渡部秀哉・首藤光太郎. 2015. 相馬市維管束植物目録. 相馬市史編さん委員会・相馬市教育委員会生涯学習部生涯学習課市史編さん室(編), 相馬市史 第8巻 特別編I 自然 別冊資料集 動植物目録, pp. 24-118. 福島県相馬市, 相馬.
10	Miyamoto & Ohba. 1988. Biogeography and taxonomy of <i>Eriocaulon atrum</i> Nakai and <i>E. kiusianum</i> Maximowicz (Eriocaulaceae). Univ. Mus. Univ. Tokyo, Bull. (37): 153-170.
11	宮本太. 2015. ホシクサ科. 大橋広好・門田裕一・木原浩・邑田仁・米倉浩司(編), 改訂新版日本の野生植物1 ソテツ科~カヤツリグサ科, pp. 280-286. 平凡社, 東京.
12	高田順. 2017. ホシクサ属植物ガイド. 自費出版.
13	吉井重幸・平澤桂 (2021) 【短報】キボシケシゲンゴロウの福島県初記録, SAYABANE N.S., (44): 48.
14	塘 忠顕 (2017) 猪苗代湖及びその周辺の池沼・湿地に生息する底生動物, 平成28年度「きらめく水のふるさと磐梯」湖美来基金水環境保全活動支援事業成果報告書.
15	塘 忠顕・横山拓未 (2020) 長瀬川の表磐梯地域の流域における底生動物相, 福島大学地域創造, 31(2): 55-74.
16	塘 忠顕・石丸青空・坂本祐樹・柴田史音 (2023) 福島県南相馬市小高区の河川における底生動物相, 福島大学地域創造, 34(2). (投稿中)
17	稲葉修(1999)福島県太平洋沿岸水系の魚類, 福島生物, (42):1-17.
18	稲葉修(2010)会津地方(阿賀野川水系)の淡水魚類, 福島生物, (53):19-32.
19	中坊徹次(編).(2013) 日本産魚類検索全種の同定, 第三版.2530pp.,東海大学出版会.秦野.
20	稲葉修・倉石信(2015)相馬市の淡水魚類, 相馬市史第8巻特別編I 自然:675-727.
21	中島淳・内山りゅう(2017)日本のドジョウ.224pp.,山と溪谷社.東京.
22	倉石信・春本宜範・藤井芳(2017)只見町伊南川における魚類相調査, 只見の自然只見町プラセンター紀要, (6):15-25.
23	春本宜範・荒木美紀・戸倉深太・永山駿(2019)只見町の伊南川各支流における魚類相, 只見の自然只見町プラセンター紀要, (7):20-27.
24	稲葉修(2001)平成12年度企画展木戸川・井出川を探る-淡水魚-(図録), 檜葉町歴史資料館, 福島.
25	稲葉修(1999)阿武隈山地の福島県地域における両生類と爬虫類, 福島生物, (42):25-34.
26	稲葉修(2000)分布北限のトウキョウサンショウウオ, 茨城生物, (20):32-34.
27	伊原禎雄・松島野枝・吉川夏彦監修(2015)平成27年度特別展ふくしまに生きる爬虫・両生類(図録), 南相馬市博物館, 福島.
28	Matsui M, Misawa Y, Yoshikawa N, Nishikawa K (2022) Taxonomic reappraisal of <i>Hynobius tokyoensis</i> , with description of a new species from northeastern Honshu, Japan (Amphibia: Caudata). Zootaxa 5168:207-221
29	日本爬虫両棲類学会, 2022. 日本産爬虫両生類標準名リスト(2022/11/6版).(PDF版) http://herpetology.jp/wamei/index_j.php
30	Shimada T, Matsui M, Ogata M, et al (2022) Genetic and morphological variation analyses of <i>Glandirana rugosa</i> with description of a new species (Anura, Ranidae). Zootaxa 5174:25-45
31	金谷弦ら 2019. 福島県いわき市鮫川干潟と茨城県日立市茂宮川干潟における大型底生動物の多様性—東日本大震災後の状況と復旧工事による影響—. 日本ベントス学会誌, 73 : 84-101.
32	環境省 2018. 平成29年度東北地方太平洋沿岸地域生態系監視調査調査報告書. 環境省自然環境局生物多様性センター, 2018年3月, 55 pp. (鮫川)
33	環境省 2021. 2020年度モニタリングサイト1000磯・干潟調査報告書. 環境省自然環境局生物多様性センター, 本文186 pp.+マニュアル72 pp.+データ表(注:本調査は2008年以降毎年実施.報告書やデータは環境省ホームページで公開.過年度報告書も参照した) 環境省は「モニタリングサイト1000」事業の干潟調査において松川浦の調査を2008年から継続しており、その結果は環境省生物多様性センターのホームページで公開されている。 http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/
34	宮城県環境生活部自然保護課 2016. 宮城県の絶滅のおそれのある野生動植物 RED DATA BOOK MIYAGI 2016. 503p.
35	日本ベントス学会編 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑—海岸ベントスのレッドデータブック—. 東海大学出版会, 285p.
36	田中正敦, 多留聖典, 海上智央, 柚原剛, 鈴木孝男, 金谷弦 2018. 東北地方太平洋沿岸からのドクテュムシの記録と「吻」の発見. 2018年度日本プランクトン学会・日本ベントス学会合同大会, 口頭発表 (No. BO06)
37	鈴木孝男 2015. 松川浦の底生動物. 相馬市史第8巻特別編I 自然, 福島県相馬市, pp.728-779.
38	鈴木孝男ら 2018. 松川浦宇多川湿地のベントス相. みちのくベントス2: 2-8
39	白瀬豊. 2001. 松川浦の魚貝類. 松川浦ものがたり[下]. 松川浦ものがたり刊行委員会, 平成13年3月, 304p.
40	山本護太郎1970ベントスと底魚の食物関係—仙台湾産マコガレイを中心として. 日本ベントス研究会連絡誌1: 43-45